

国語教育と言語——明治のことば——

萩原 桂子

九州女子大学人間科学部人間文化学科
北九州市八幡西区自由ヶ丘二一（〒八〇七―八五八六）

（二〇〇九年五月二十八日受付、二〇〇九年七月六日受理）

要旨

国語教育とは、個人に対して言語知識を身につけ、言語技能を練磨し、言語感覚を高めることを促すことにあるといえる。日本語共同体を構成する日本人の言語能力を養成し、日本社会を豊かにするには、日本語力の活性化はかる国語教育が重要である。イ・ヨンスク氏は、『国語』概念の成立過程が『日本語』の同一性そのものの確認の作業と並行していた^①とし、「日本が近代国家としてみずからを仕立て上げていく過程と並行して、『国語』という理念と制度がしだいにつくりあげられていった^②」と指摘する。国語教育を実施するにあたっては、まず何よりも日本語について知っておく必要がある。国語教育の目的は、社会の言語である日本語を、さまざまな言語活動を通じて、個人の言語素養として定着させることにある。明治の国語施策にすであつた「日本語廃止論」をはじめとする日本語の有用性に対して、水村美苗氏が指摘する「自然科学そのものにとつても、日本語で思考するのは意

味がある」という視点は衝撃である^③。さらに、文字を読み書きする力は、人間にのみ与えられた能力の一つであり、ヒトとチンパンジーのDNAの塩基配列は、ゲノム全体で一・二三%しか異なっていない^④。人間がチンパンジーと際立つて違うのは、認知能力のなかでも特に言語能力においてである。人間は、ことばを操ることに長けていたことで、高度の技術を獲得することができた。ことばとは、人間が人間であることをゆるしたもつとも特異な資質なのである。人間は、ことばを声によつて操る「声の文化」から、ことばを文字にすることで「文字の文化」を創造した。現代は、エレクトロニクスの時代といわれ、『二次的な声の文化』^⑤、つまり、電話、ラジオ、テレビによつて形成される声の文化の時代^⑤を迎えている。さらに、その「二次的な声の文化」をささえているのが、「なんでもかんでもコンピュータに搭載できる」ということばを離れた文化なのである。現代は、人間が、ことばとどう向き合っていくかが問われる時代なのである。グローバルズムのなかで、日本が成し遂げなければならない課題は、ナショナ

リズムや政治とは絡めない視点で国語教育と言語に取り組むことなのである。

はじめに

熊澤龍は、「国語教育の目的は、社会の言語である国語を、個人の言語活動を通じて、個人の言語素養たらしめるにある」^①と述べている。言語素養とは、個人の言語活動を進行させ実現させるための言語知識・言語技能・言語感覚である。したがって、国語教育は、個人に対して言語知識を身につけ、言語技能を練磨し、言語感覚を高めることを促すことにあるといえる。

国語教育の目的は、社会の言語である日本語を、さまざまな言語活動を通じて、個人の言語素養として定着させることにある。日本語共同体を構成する日本人の言語能力を養成し、日本社会を豊かにするには、日本語力の活性化はかる国語教育が重要である。国語教育は、活きた表現体の言語によって言語知識・言語技能・言語感覚を習得させることであるのだが、特に問題となるのは、言語としての国語という概念である。

明治期の国語調査委員会（一九〇二年官制公布）から一〇〇年をへて、二〇〇六年には文化庁から、『国語施策百年史』が刊行された。国語は国家の歴史とともにあるが、国語施策という観点から、明治の国語教育を勇猛果敢に実施した近代日本の言語認識

について考え、国語教育と言語について考察する。

一 国語教育について

最初に、考えなければならないのは、日本における国語の概念である。イ・ヨンスク氏は、『「国語」概念の成立過程が『日本語』の同一性そのものの確認の作業と並行していた』^②とし、「日本が近代国家としてみずからを仕立て上げていく過程と並行して、『国語』という理念と制度がしだいにつくりあげられていった」^③と指摘する。

前島密の「漢字廃止論」を始めとして、明治政府の初代文部大臣となった森有礼の「日本語廃止論・英語採用論」や、前島密・西周等の「国字改良から言文一致へ」の動き、上田万年の「国語と国家と」の言語思想、上田万年の後継者である保科孝一の「国語学」による言語政策まで、近代日本の言語認識は目まぐるしく展開していく。

ただ、森有礼の「日本語廃止論」は、ホイットニーやアメリカの有識者によって斥けられ、「一国の国語を廃して、外国語によって学術研究と高等教育を行うことが所詮、その国の文化を特別の階層に局限させることになり、終局的には沙汰止みになりやすい」^④と説く日本人もあった。「新しい学術上の知識や文物制度に関する知見を、限られた階層の独占にゆだね、教育というものを

ひとにぎりのエリートのもと考えるかぎり、日本語の改良とか開発ということは、まったく不要なことであつたかもしれない。だが、科学技術や哲学や宗教や文物制度を万人の頒ちもつべきものと考え、また、日本のできるだけ広範囲のひとびとが、高いレベルの教育を受けるべきであると考えるかぎり、日本語を、それに堪えるものに改良しなければならぬ。こういう選択は、日本に対して思いやりのあつたすべての外国人によつてもなされたし、また、日本の有識者にも受け入れられはじめた¹¹⁾というのである。日本の現代の高等学歴は、高等教育に耐えうる日本語を形成した明治の知識人による深い言語認識のおかげである。

森有礼は、一八八六年（明治一九）に「学校令」を發布し、小学校、中学校、師範学校、大学校を国家統制のもとに配置する近代的教育制度を確立した。こうした近代教育制度は、一九〇〇年（明治三三）八月の小学校の「国語科」の設置を実施し、「国語」という価値規範を示したのである。

国語教育は、一九〇二年（明治三五）三月に、東京大学総長加藤弘之が委員長となって「国語調査委員会」が設立されること由国家事業として取り組まれることになる。翌一九〇三年（明治三六）の教科書国定制によつて、最初の国定国語教科書「尋常小学校読本」が作られた。この教科書では「漢字節減、仮名字体の統一、表音的棒引き仮名づかいの使用、おおはばな口語体の採用（『デアリマス』にかわる敬体の『デス』、常体の『ダ』）など、一

見進歩的な方向をさししめしているが、終局的な目的は標準語教育にほかならなかつた¹²⁾」というのである。

国家を統一するには、国語という日本のどこでも通用する話し言葉の制定が必要であつた。教科書でも、話すように書くという言文一致体の文章が文語体・口語体を行ったり来たりしながら徐々に進化した。一九〇〇年（明治三三）、帝国教育会内に「言文一致会」が創設され、翌年には「言文一致の実行に就ての請願」が採択され、先にあげた標準語による口語文の教材を数多く取った教科書ができた。

また、「明治四三年の国定教科書では、口語文によつてすべての教科書が書かれ¹³⁾」、「言文一致会は、明治四三年十一月、『文章は残らず言文一致にする』という最初の目的を達成したとして、解散され¹⁴⁾」た。明治の近代言語への試行錯誤は多くの国語学者・国文学者・社会学者・思想家・政治家を巻き込んで展開されるのである。日本が、近代国家として自らをしたてあげていく過程と並行して国語という概念と制度がつくりあげられていくのである。

その後、一九三四年（昭和九）に、文部大臣の諮問機関として官制による国語審議会ができるが、一九四九年（昭和二四）からは文部省設置法によつて定められた政令による国語審議会が二〇〇一年（平成一三）まで存続する。それ以降は、「文化審議会の国語分科会として文部科学大臣の諮問機関となっている¹⁵⁾」のであ

り、これは「学校教育の教科書表記を結果的に規定し、あるいは新聞などのメディアもしたがう部分が大きく、日常接する日本語表記の事実上の基準になっている」という。^⑮

現代にいたっても、日本の国語教育は、歴史派と現在派という対立構造は近代さながらに、さまざまな課題に取り組みながら混沌としたなかを模索し続けているのである。伝統尊重と合理化のせめぎあいのなかで、これからの国語教育はどこに進もうとしているのであろうか。

国語教育を実施するにあたっては、まず何よりも日本語について知っておく必要がある。石川九楊氏は、日本語の特異性についてつぎのように述べている。^⑯

日本語の特異性は、ひとつには、書字中心言語であること、第二には、漢字＝漢語と平仮名＝和語と、つけ加えれば、片仮名＝西欧語さえも併せもつ、二重、多重性言語という構造の中にある。

こうした多重的な語彙と文体を併せもつ日本語を国語とするわれわれは、国語教育に関しても、柔軟かつ細心の注意力で取り組まなければならない。

言語活動とは、自己の言語表現を表出する活動（話す・書く）と他者の言語表現を受容する活動（聞く・読む）である。また、

言語には音声言語と文字言語がある。話す・聞くという言語活動は音声言語によってささえられ、書く・読むという言語活動は文字言語によってささえられている。したがって、音声・文字という方法を用いて表出・受容という活動を行うために言語があるといえる。

しかし、ことばは日常生活の手段としてだけ機能していればよいというものでは決してない。ことばは、他者との大切なコミュニケーションの道具なのである。生活がどれほど便利になっても、他者との関係性が円滑にいかなければ人間の心は満たされない。

二 言語について

イ・ヨンスク氏は、「言語とは人間にとって最も自明な何かである」と指摘する。^⑰ また、「言語を民族精神の精髓とみなす言語ナショナリズムと、言語をあくまでコミュニケーションの手段としてしか考えない言語道具観は、おなじ言語認識に時代の双生児なのである」とも指摘する。^⑱ たとえば、国語という制度が、近代国家を支える項目となったのは、フランス革命のときであり、フランス語は、国語としてフランス国民の精神的象徴となったのである。近代日本においては、国語という理念はまったくなかったとイ・ヨンスク氏は指摘する。^⑲

近代日本においては、「日本語」という地盤が確固として存在した上に「国語」という建築物が建てられたのではない。むしろ、「国語」というのはでやかな尖塔が立てられた後に、土台となる「日本語」の同一性を大急ぎでこしらえたという方が真相にちかいだろう。

日本における国語の概念の問題は、日本語の同一性の確認作業と平行して行われなければならないのである。講演「国語と国家」とにおいて国語という概念を描き出した上田万年とその継承者である保科孝一の試みた国語という体制は、近代国家日本の国語という理念と制度にとって重要である。

次に、日本語における近代そのものの特質を説明する。

上田万年（一八六七年—一九三七年）は、漱石と同じ年に生まれ、帝国大学和文科を卒業している。英文科を卒業した漱石とは違って和文科を卒業した上田は、ドイツ留学を前にして、これからの日本語研究は、古学を中心とした従来の国学ではなく、言語学の原理と教育学の原理に基づいたものでなければならぬことを強調した。つまり、上田にとって学問は常に実践にむすびついたものであり、国語の真の姿を明らかにすることが言語そのものの研究なのである。上田は、「言語上の変化を論じて国語教授の事に及ぶ」と題して次のように論じている。^①

まだ日本では、言語といふものはどんなものか、国語の性質歴史などはいかなるものか、といふような事を熟知して居る人は至つて少なく、従つてその国語を組織立てゝ教へるだけの人があまりありませぬ。即ち国語は如何なるものかといふ問題が充分解釈せられぬ処から、国語は如何にして教ふべきかといふ問題も充分成立せず居る時であります。

上田は、言語が社会の精神的歴史の鏡であることを理論的に説明しているのである。上田は、言語の科学的原理によつて「この国に對し、真正の方向を立てゝ、よく開拓し、善を取り、惡を去り、不便を棄て、便利を求め、さうして後秩序井然たる大日本帝国の国語を造り出すこと」^②ができると考えたのである。

上田の近代言語学への情熱は、新村出、小倉新平、金田一京助、橋本進吉、藤岡勝二、岡倉由三郎などの多くの言語学者・国語学者を生み出したのである。そのなかで、上田の国語教育の理念を引き継いだのが、保科孝一（一八七二年—一九五五年）であった。保科は、一八九八年（明治三一）文部省嘱託になつて以来、表音式仮名遣、漢字制限、公的機関での口語文の採用を実行しようとする。

しかし、ここで重要なことは、近代日本の国語は、国語学という純粋な学問として発展しただけではなく、国語という理念には、言語政策という政治と切り離せないものがあつた。科学的国

語学と言語政策は、切っても切れないわけありのものであったのである。

国語である日本語の運用能力を鍛えることは、日本人としてのアイデンティティーを確立するという精神発達の要ともいえる。日本語共同体を構成する日本人の人間力を高め、日本社会を豊かにするには、日本語力の活性化をはかる必要があった。

ここで、標準語と共通語という概念が登場する。標準語という概念には、戦前の暗い影が付きまとうことになる。そこで、標準語の一步手前のニュアンスをもつ共通語という概念が、国語教育の目標となるのである。国語とは、同化政策の一環ではなく、言語教育の教化の一環でなければならない。国語という概念を見据え近代日本語の実際の姿を追うことにする。

三 明治のことば

国語教育と言語の種々相に注目し、言語教材としての古典読みに焦点をあわせ、明治の文学作品を読んでみることにする。ここでいう古典とは、時間や空間の変遷にも色褪せず、作品の魅力を発揮するものである。古典は世紀を超えて生き続ける表現体であり、国語教育では、これら活きた表現体の言語によって言語知識を身につけ、言語技能を練磨し、言語感覚を高めることが大切である。

日本の近代文学は、文体改革から始まった。国漢教育という国語と漢文の教育が主流であった時代には、現在の平明な文体とは似ても似つかぬ厳格な文体があった。文語文から口語文への変遷は、明治初年のさまざまな文章家の努力がなされた結果である。

明治期の文語文には、漢文脈の清冽な響きがあり、音読しても身体が引き締まる緊張感がある。残念ながら現在の学生には、この文語文で書かれた明治期の文学作品に対する読解力がなくなっており、読書の幅も狭くなっているのが実情である。

国語教育においては、言語と文学の教育が独立しておこなわれていない。言語教育と文学教育は、その自立性を尊重しながらも、共同でおこなわれるのが理想である。

文学教材の一つに小説があるが、小説を読む内容価値は、普段の生活のなかで見過ごされていたものの見方や真相に気付かされ、自己と真摯に向き合う機会を与えられるという点にある。虚構のなかに埋め込まれたさまざまな視点が自己の暗部を照らし出すのである。

傑出した小説とは、個人にしか書けない特異な出来事に、他者が読んでもわかるような普遍性をもたせたものである。小説を読む醍醐味は、虚構のなかで、もう一人の自分に出会うことにある。こうした体験は、個人の内的世界を広げ、他者への共感によって開かれた自己の形成に役立つものであり、自己の価値観や問題意識を育てる精神発達の重要な要素となる。それは、自己と

小説テキストの間でおきるもうひとつの新たな体験となるのである。

また、小説を読む表現価値は、言語能力の開発におおきな効力を発揮するという点にある。すぐれた小説の文学表現には、個人の言語表現に影響をあたえ、小説の言語によって自己のことが磨かれるのである。

ここでは、まず、明治の文豪森鷗外について論究する。

鷗外文学の主題の一つに「喪失」がある。鷗外の作品には、自分の愛するものを喪うという痛恨の想いが描かれたものが多い。『サフラン』（大正三年三月「番紅花」）には、幼少期にしか得られない遊びへの期待感の喪失が描かれ、『ヰタ・セクスアリス』（明治四二年七月「スバル」）には、学齡期の友だちとの連帯感の喪失が描かれ、『妄想』（明治四四年三・四月「三田文学」）には、思春期の自己形成への時間の喪失が描かれている。津和野の神童とたたわれた鷗外は、「始終何物かに策うたれ駆られているように学問ということに齷齪している」（『妄想』）という想いがあつた。さらに、鷗外の文語文で書かれた作品『舞姫』（明治二三年一月「国民之友」）では、喪失は絶頂を極める。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙をそそぎしは幾度ぞ。大臣にしたがいて帰東の途にのぼりしときは、相沢とはかりてエリスが母にかすかなる生計を営む

に足るほどの資本を与え、あわれなる狂女の胎内にのこしし子の生まれんおりのことをも頼みおきぬ。

ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得がたるべし。されどわが脳裡に一点の彼を憎むころきようまでも残れりけり。（『舞姫』）

太田豊太郎は、やわらかい心を捨て、硬い理性で世をわたるという苦渋の選択をするのであるが、理性では割りきれない身体の中の痛みが、心の叫びとなつて喪失という主題を際立たせている。明治時代のスローガンでもある富国強兵の先鋒にたつ官僚太田豊太郎の立身出世への野望と自我覚醒への挫折、さらに深刻な苦悩が見事に描き出されている。このように、鷗外の読書では、喪失への共感が揺さぶられるのである。

つぎに、俗語が混交した雅俗折衷文体で書かれた樋口一葉の読書について論究する。鷗外に「われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人というふ称をおくることを惜まざるなり」（『三人冗語』『めさまし草』）といわしめた一葉の『たけくらべ』は、明治二八年一月から明治二九年一月にかけて「文学界」に発表された。

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取るごとく、明けくれなしの車の行来

に、はかり知られぬ全盛をうらなひて、

「大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽氣の町」

と住みたる人の申しき。(『たけくらべ』一)

吉原遊郭がある通称大音寺前を舞台に、千束神社の夏祭りから一月の酉の日の大鳥神社の祭礼までの時間が描かれている。妓楼大黒屋の美登利はおきやんで陽氣な一四歳の少女である。しかし、いつかは姉の大巻のように店にでなければならぬ。一葉は、明治という新しい時代に、逃れようもなく意味づけられている女であるという「諦観」を作品に見事に描き出している。一葉の読書では、明治という時代に生きた声なき女たちの魂の叫びを聞くことができる。

さらに、明治の文豪夏目漱石の読書について論究する。漱石は、鷗外に比して現代の若者にも馴染みのある作家だが、その理由には文体の問題があり、しかも、活躍したのが明治四〇年代から大正期という口語文体が確立する時期に、新聞というマスメディアを媒体として作品を発表したという幸運がある。

『吾輩は猫である』(明治三八年一月から明治三九年八月「ホトトギス」)で颯爽とデビューし、『坊っちゃん』(明治三九年四月「ホトトギス」)は現代でも若者に絶大な支持を受けている。漱石は、饒舌な語りで読者を魅了する。

議論のいい人が善人とはきまらない。やりこめられるほうが悪人とはかぎらない。表向きは赤シャツのほうが重々もつともだが、表向きがいくらりつぱだつて、腹の中までほれさせるわけにはゆかない。金や威力や理屈で人間の心が買えるものなら、高利貸でも巡査でも大学教授でもいけばんに好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらゐな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好ききらいで働くものだ。論法で働くものじゃない。(『坊ちゃん』八)

『ころ』(大正三年四月から八月「東京・大阪朝日新聞」)では、明治という時代の終焉を作品に盛り込み、哀切極まりない人間の魂の軌跡を見事に描ききつた。さらに、絶筆『明暗』(大正五年五月から一二月「東京・大阪朝日新聞」)では、人間の暗部に巣くうエゴイズムの問題を深く抉り出し、自己と他者の関係性という漱石文学の主題が細密に描き出された。

ここに取り上げた三人の作家の作品にこめられた明治のことばは、活きた表現体の言語として、我々の言語知識・言語技能・言語感覚に深く影響をおよぼすのである。

おわりに

明治の国語対策にすでにあつた「日本語廃止論」をはじめとする日本語の有用性に対して、水村美苗氏が指摘する「自然科学そ

のものにとつても、日本語で思考するのは意味がある」という視点は衝撃である。⁽²³⁾

言語の構造で人間と動物の位置が地続きなっているからこそ、霊長類の固意識別などという発想がおのずから生まれる。(中略)でも、さらに心すべきことは、非西洋語で思考することによって、西洋語では見えにくいものが見えてくるという言葉の固有性もつ力だと思えます。日本の自然科学者は、学問の〈読まれるべき言葉〉の連鎖に入るためになんとかがんばって英語で書かなくてはなりません、日本語で思考することは、発想の転換を可能にし、自然科学そのものに貢献できると思います。

日本語という言葉の構造に、西洋語にはない発想が潜んでいるということである。言語は、その精神構造・思考回路を左右する神秘的ともいえる能力を秘めているのである。これは、一二歳でアメリカに渡り、その後高等教育でフランス語を学んだトライリンガルの水村美苗氏が、普遍語である英語以外のすべての現地語に対して発信する重要なメッセージである。ことばは単なる記号ではなく、それを操る人間の生きる力そのものの在処なのである。国語教育と言語は、これからの日本を元気にする重要な鍵である。

水村美苗氏は、明治維新以降、日本語が国語として成立できた

条件として、二つあげている。⁽²⁴⁾

一つは、日本の〈書き言葉〉が、漢文圏のなかの〈現地語〉でしかなかったにもかかわらず、日本人の文字生活の中で、高い地位をしめ、成熟していたこと。

もう一つは、明治維新以前の日本に、ベネディクト・アンダーソンがいう「印刷資本主義」がすでに存在し、その成熟していた日本の〈書き言葉〉が広く流通していたこと。

漢字は、ローマ字アルファベットなどとはちがひ、表意文字である。声に出して読むことよりも、目で読むことに重きをおいた文字である。日本人は、最初、漢字の意味を捨て、漢字を日本語の音を表わす表音文字として使ったのが万葉仮名である。この万葉仮名が簡略化されて平仮名と片仮名に分かれていき、現在使われている二種類の表音文字を生むことになったのである。

人間は自己意識がチンパンジーより進化しており、その結果、心の論理が発達し、他者の心を理解するという優れた能力を発揮することができるようになった。書くという行為は、自己認識の応用であり、ことばを空間にとどめることである。

さらに、文字を読み書きする力は、人間にのみ与えられた能力の一つである。ヒトとチンパンジーのDNAの塩基配列は、ゲノム全体で一・二三%しか異なっていない。⁽²⁵⁾人間がチンパンジーと際立って違うのは、認知能力のなかでも言語能力におい

てである。

人間は、ことばを操ることに長けていたことで、高度の技術を獲得することができた。ことばとは、人間が人間であることをゆるしたもつとも特異な資質なのである。

人間は、ことばを声によって操る「声の文化」から、ことばを文字にすることで「文字の文化」を創造した。現代は、エレクトロニクスの時代といわれ、「二次的な声の文化」、つまり、電話、ラジオ、テレビによって形成される声の文化の時代⁽²⁶⁾を迎えている。さらに、その「二次的な声の文化」を⁽²⁷⁾ささえているのが、「なんでもかんでもコンピュータに搭載できる」という文化なのである。

現代は、人間が、ことばとどう向き合っていくかが問われる時代なのである。グローバリズムのなかで、日本が成し遂げなければならない課題は、ナショナルリズムや政治とは絡めない視点で国語教育と言語に取り組むことなのである。

註

- (1) イ・ヨンスク『国語』という思想——近代日本の言語認識』岩波書店、一九九六年一二月、v頁。
- (2) イ・ヨンスク 同掲書、vi頁。
- (3) 『ユリイカ』第四一巻第二号 水村美苗「世界史における日

本語という使命」青土社、二〇〇九年二月、四〇頁。

- (4) 中村三知夫『チンパンジー』中公新書、二〇〇九年四月、一四頁。

- (5) W・J・オング著、桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、一九九一年一〇月、八・九頁。

- (6) 安田敏朗『国語審議会——迷走の60年』講談社現代新書、二〇〇七年一一月、二七〇頁。

- (7) 熊澤龍『言語理論と国語教育』明治書院、一九六五年。

- (8) イ・ヨンスク 前掲書、v頁。

- (9) イ・ヨンスク 前掲書、vi頁。

- (10) 齋藤毅『明治のことば 文明開化と日本語』講談社、一九七七年一一月、講談社学術文庫、二〇〇五年一一月所収、二四頁。

- (11) 齋藤毅 同掲書、二六頁。

- (12) イ・ヨンスク 前掲書、一五〇頁。

- (13) 山口仲美『日本語の歴史』岩波新書、二〇〇六年五月、二〇五・二〇六頁。

- (14) 山口仲美 同掲書、二〇六頁。

- (15) 安田敏朗 前掲書、九頁。

- (16) 安田敏朗 前掲書、一〇頁。

- (17) 石川九楊『二重言語国家・日本』日本放送出版協会、一九九九年五月、三三頁。

- (18) イ・ヨンスク 前掲書、i頁。
- (19) イ・ヨンスク 前掲書、ii頁。
- (20) イ・ヨンスク 前掲書、iii頁。
- (21) 上田万年 『明治文学全集44』 筑摩書房、一九六八年、一七〇頁。
- (22) 上田万年 同掲書、一七九頁。
- (23) 水村美苗 『ユリイカ』 前掲書、四一・四二頁。
- (24) 水村美苗 『日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で』 筑摩書房、二〇〇八年一〇月、一五八頁。
- (25) 中村三知夫 前掲書、同頁。
- (26) W・J・オング著、桜井直文他訳 前掲書、同頁。
- (27) 安田敏朗 前掲書、同頁。

※森嶋外の本文は、『舞姫』（角川文庫、一九五四年六月）、樋口一葉の本文は、『たけくらべ』（集英社文庫、一九九三年十二月）、夏目漱石の本文は、『坊っちゃん』（角川文庫、一九五五年一月）に拠った。

Japanese Teaching and Language

—Meiji language—

Keiko OGIHARA

Department of Humanities, Faculty of Human Science,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract